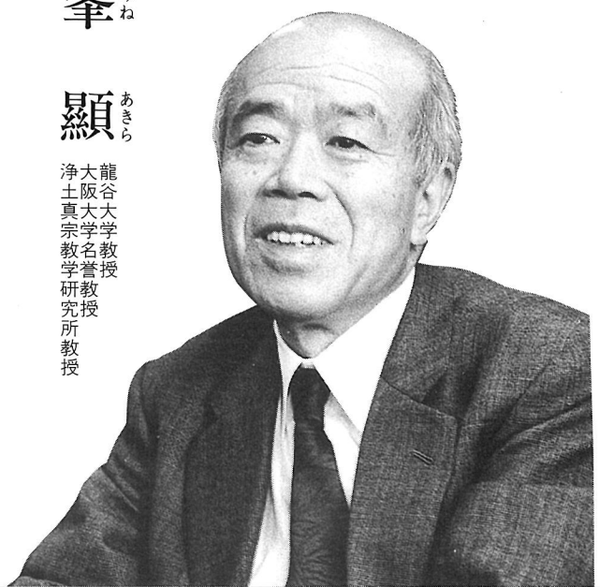
宗教への招待

第三回 現代人と死①

大峯 顯（おおみね あきら）
龍谷大学教授
大阪大学名誉教授
浄土真宗教学研究所教授



死が抑圧されている

現代人の人生や世界についての考え方と、近代以前の人間のそれとを比べますと、いろいろな違いが目につきますが、なかでも最も根本的で、見逃すことのできない違いが一つあります。それは、死というものに対する人間の態度が、根本的に変ってしまったということです。では、どのように変ったのでしょうか。それは、現代人には、死という観念に対する極端な抑圧、むしろ異常なくらいの拒絶反応が生れてきたということだと思われます。

たとえば、ドイツの哲学者マックス・シェーラー（一八七四―一九二八）は、このことにいち早く気づいた一人です。シェーラーは、比較的若く死にましたので、ハイデッガーほどには一般には知られていませんが、現代文明の危機について深く鋭い洞察を示した、すぐれた思想家です。彼は、一九一一年頃に書いた「死と永生」という論文の中で、「現代西ヨーロッパ人」という新しい人間類型は、それ以前の時代の人類とちがって、人間が死ぬという事実を承認しようとしない新しいタイプの人類だ、ということを言っています。もちろん、生を愛し死を嫌悪するということ自体は、人間の本性に属する自然な傾向といえるでしょう。現代人だけでなく、すべての時代の人間の心には、死に対する自然な拒否の傾向があります。ただ、現代人においては、この拒否が極めて不自然で異常な仕方になってしまった、と言うのです。

シェーラーが「現代西ヨーロッパ人」とよぶのは、西ヨーロッパに住んでいる人間だけに限りません。そうではなく、人生の目的を、仕事と金もうけという二つのエレメントに見出しているような人間のタイプのことです。そういう新たな人間類型が出現したのは、近代ヨーロッパにおいてではありますが、今日ではこれが地球全体にひろがっています。当然、われわれ現代日本人も、この類型の中に入ってくるわけです。この人間類型にとっては、働いたりお金をもうけたりすることは、もはやかつての人類のように、生きるための手段ではありません。仕事と金もうけ、それ自身が、人生の最終目的となっているのです。仕事のための仕事、金もうけのための金もうけ、ということが、一つの無限な衝動となって人生を貫くとき、死というものに対する人間の伝統的な考え方が一変することになります。人間生活のすべての領域から死という観念を追い払おうとする態度、死に対する異常なまでの拒絶が、意識的・無意識的に現代人の心の深層を支配している、というシェーラーのこの洞察は、実に正しいと思います。

今日、私たちの社会生活の中のいたるところに、死に対するこのような拒絶が姿をあらわしています。たとえば、病院の入院患者の部屋には四号室が欠けていたり、団体旅行のバスにも四号車をつくらなかったりすることもそうです。数字の四（シ）の音が、死（シ）に通じるからということでしょうか。数年前になりますが、私が手術のために、ある国立大学の医学部の附属病院に入院した折、これが事実であることを確認したことがあります。私は三号室に入院していましたが、隣の部屋は物置（ものおき）か何かで、一つ飛んで次は五号室です。どうして四号室はないのですか、と先生に尋ねますと、われわれは何とも思っていないけれど、患者さんが厭（いや）がるので四号室はつくらない、という返事が返ってきました。近代科学の最先端に立つ大学病院の中にある、信じ難いような出来事ですが、まぎれもない事実であります。これは、たんなる迷信ではなく、現代人の心の深部にある根本傾向のあらわれだと思います。われわれは別に迷信をかつがないといっている医師たちもまた、死に対するこのような拒絶というものに裏側で加担しているわけです。

もう一つの例は、ある学会で経験したことです。これも数年前、ある哲学会で「生命とは何か」というシンポジウムが開かれました。私も、その提題者の一人として参加したのですが、他の提題者たちの発言の中には、ついに死という言葉が出てこなかったのを記憶しています。生命というものを、哲学の見地から根本的に考えるのなら、死というものをふくめて考えるのが当然のことです。これまでの偉大な哲学者たちはみな、生の意味を問うとき、かならず死というものをふくめた生を問うてきたわけです。しかるに、今日の日本の哲学者たちの生命論には、意識的にか無意識的にか、死の問題がすっかり欠落しているのです。他の提題者の発表の中に、たった一度だけ死という言葉が出てきましたが、それは「生きるも死ぬも金次第」という言葉でした。こういう現状を目撃しますと、現代日本の哲学は、もはや哲学者にとっての根本条件というものを喪失したのではないか、という気持にならざるをえません。このように、われわれ日本人もやはり、シェーラーが言う「現代西ヨーロッパ人」の一員であるわけです。

永生の観念の無力化

それでは、現代人における死の観念の、この異常な

抑圧は、いったい何に由来するのでしょうか。いうまでもなく、伝統的な世界宗教、仏教やキリスト教で説かれてきた魂の不滅や死後の永生という観念が、現代人の感受性に訴える力をもたなくなったからです。世界宗教が発見した偉大な真理の生命が硬直して、現代人の生活感情を支え切れなくなった、といったらよいでしょうか。仏教やキリスト教を信じて生きていた過去の人びとにとっては、この世の生の意味を超越的な死後の生に求めるということは、自然なことでありました。それは人びとの生活の実感だったわけです。しかるに今日では、そのような考え方は、実感をともなわない不自然なドグマになってしまったようです。死後の永生という観念は、現代人の意識からはほとんど消えかけています。

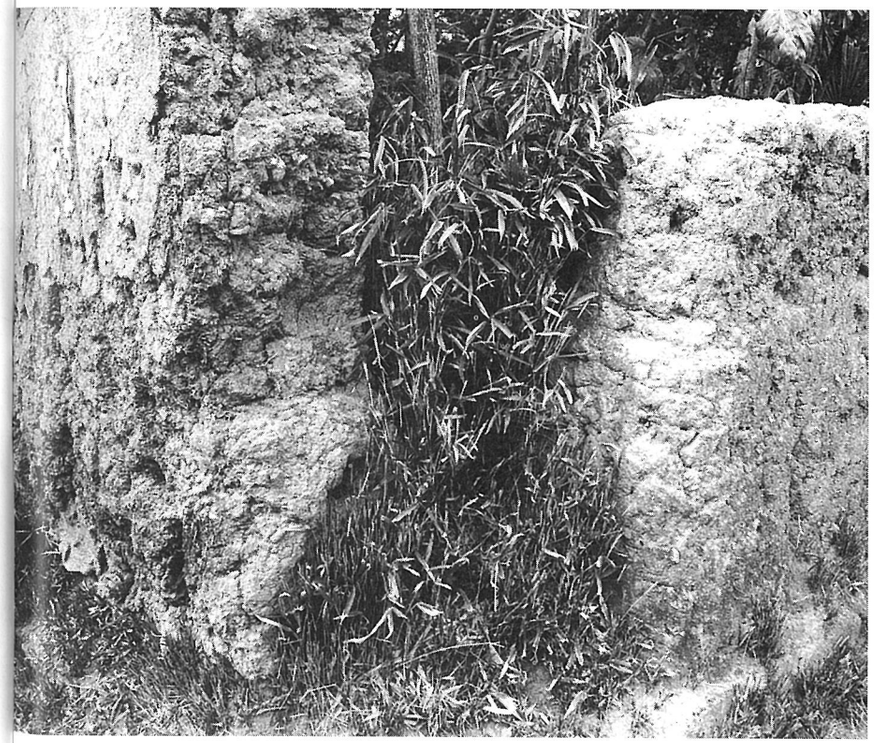
このことの原因としては、自然科学の発達があげられるのが普通ですが、そこのところの事情はもっと複雑だと思います。自然科学は、死後の永生という観念の殺害者ではなく、たんに埋葬者にすぎない、というふうに見る哲学者もいます。いずれにしても、死の後に天国とか極楽浄土があるというようなことは、もはや信じられ難くなったことは事実であります。死後には何も無いとしたら、残ってくるのは、今生きているこの世の生だけです。しかるに、この唯一つのかけがえのない生が死によって奪われるわけですから、死が現代人にとって憎むべき敵になるのは自然なことでありましょう。われわれから一切のものを奪ってしまう

ような死はあってはならないというのが、現代人の唯一の結論になります。このようにして、死の観念に対する現代人の異常なまでの拒絶の態度が生れてくることになるわけです。

しかしながら、このように現代人が、どんなに死を拒絶して、それから目をそむけようとも、死は依然として厳然たる事実です。死後の永生は、現代人に対する実在性を喪失したとしても、死それ自身は現代人にとっても実在します。むしろ、現代人には、死後の代りに死それ自身が大きな実在となっているわけです。この大きな実在に対して、心の底からイエスという言葉をいえない以上、現代人の生の状況は、要するにニヒリズムだというほかないでしょう。ニヒリズムというのは、根底をもたない浮草のような生という意味です。自分たちがニヒリズムの中にあるということを、現代のわれわれは気づいていないわけです。これは他でもなく、現代人にとって、人間存在とはいったい何か、ということが不明になったということを意味します。「われわれは、人間が完全に且つ全面的に問いに化してしまった最初の世代である。人間はもはや彼が何であるかを知らない」と、シェーラーが言うゆえんであります。

ハイデッガーにおける死の哲学

現代人のこのような状況を、最も正直に見すえ、そこから脱出する途を探った人は、二十世紀最大の哲学者マルチン・ハイデッガー（一八八九―一九七六）だ



と思います。哲学者ハイデッガーの考えていたことは、実は、死後の永生を失った現代人にとっての新しい宗教性の次元の提言だった、ともいえます。その次元を、彼は死の解読の中に見出そうとしたのです。

ハイデッガーの『存在と時間』（一九二七年）は、今世紀の哲学界全体を根底から震撼させた有名な著作であります。この本の中で、彼は、プラトン哲学にはじまり、キリスト教を経て、近代ヨーロッパの形而上学まで流れている死後の永生の哲学を批判する一方、死というものを忘却しようとする現代人の生き方を鋭く告発しました。一言でいえば、人間存在を真に回復するためには、死というものの復権が必要だという死の哲学を展開したわけです。人間存在の意味を、ギリシャ哲学やキリスト教のように、魂の不死とか死後の永遠の生というものに見出そうとする思想、つまり生の哲学は、もはや説得力をもたなくなったことを、ハイデッガーは承認します。伝統的な形而上学とキリスト教が説いてきた永遠の生が信じられないならば、われわれに残された現実は死しかありません。それゆえハイデッガーは、この死と正面から対決すること以外に人間が真に人間になる途はない、ということを力説するのです。

ハイデッガーは、人間存在を現存在とよび、これを死への存在（Sein zum Tode）というふうに定義します。これは、人間はみな、いつかは死ぬ、というような意味ではありません。生の終りは死だというのではなく、生れたときにすでに死ぬようになっているのが人間だ、という意味です。人間はいつかは死ぬ、と誰でも知ってはいます。けれども、そういう場合、死は生の外からやってくる現象だと思っているわけです。つまり、だんだんと死に近づいていって、そのときまで自分がひっぱって来た生の糸が突然断ち切られるアクシデント、それが死だと思っています。初めはなかったもの、あるいは遠くにあったものが、ある日突然出現するのを死と考えているわけです。ハイデッガーは、この考え方が根本的に間違っていると言うのです。「死への存在」ということは、いつかは死ぬということではなく、はじめから死ぬようになっているということです。死は、生の終りに初めて出てくる現象ではなく、われわれの誕生と同時にすでにはじまっており、われわれの生はいつも死と一緒にあるという意味です。われわれは、死への存在という以外のどんな生き方もできない、すべての人間は、生れたときにすでに、死ぬのに十分な歳をとっているわけです。

そうしますと、われわれの生が生としてありうるのは、実に死があるからだということになります。それがないことには、われわれの生それ自身がどこにもなくなるようなもの、それが死であるわけです。死とは現存在の存在不可能の可能性だとハイデッガーが言うのは、そういう意味です。むろん、死によってわれわれの現存在は終り、われわれの存在は、もはや不可能になります。しかし、そのことはたんなる外的な事故として起こるのではなく、現存在の内部にふくまれている可能性として起こるというのです。可能性とは、人間存在をしてはじめて人間存在たらしめるゆえんのもの、ということです。それゆえハイデッガーは、人間の現存在は、それの存在が不可能にされるような事態、まさしくそのような事態から、かえって可能にされていることを洞察しているわけです。われわれが生き得ているのは、実に死の根底からだと言うのです。死がわれわれを生かしているといいかえてもよいでしょう。

ハイデッガーの限界

ここからハイデッガーは、人間が本当に生きるためには、そういう死を平生から先き取りして生きる以外にはない、という結論にいたっています。死を遠い未来のこととして置かないで、勇気をもって死を直視し、これを、われわれのこの現在に引き受けることが大切だ、と言うのです。まだやって来ていない死というものを、自己の今・ここでのこととして受けとること、死への先駆的決意という態度を、ハイデッガーは提唱するわけです。これが『存在と時間』の中の最も大事な思想です。人間存在の真実は、死というものを自分自身のこととして引き受けるところにしかない、死を忘却の中からとりもどすことこそ、人間存在が自分に覚醒する唯一つの途であることをハイデッガーは教えたわけです。

ハイデッガーのこの思想は、死後の永生を説いてきたヨーロッパの形而上学や宗教よりも、むしろ仏教の生死の思想に近いところがあります。じっさい、ハイデッガーの死の哲学のもつ迫力は、現代の状況に敏感なヨーロッパの若い知識人たちの感受性を圧倒的な力で捉えたのです。それにもかかわらず、ハイデッガーのこのような立場は、人間存在の本当の解決にはならない、と私は思います。それはどこか、武士道とは死ぬことと見つけたり、という『葉隠』の考え方を思わせます。たえず死と自覚的に対面して生きるのが真理への道だ、という考え方は、仏教的にいえば自力的なはからいがあり、そのため、死は重苦しくハイデッガーにのしかかっているわけです。一言でいいますと、ハイデッガーでは、現存在から死への方向は詳しく分析されていますが、死から現存在への方向は必ずしも明らかではありません。われわれの生を吸いこむ死の面だけを述べていて、そういう死の底から生がどのようにして回復されうるかが、もう一つはっきりしないのです。これは仏教の見地から見てどうしても一面的だと思われます。